

「清議報」登載の「佳人奇遇」について

——特にその譯者——

許 常 安

戊戌維新以前においては、「時務報」を主催して「變法維新運動」を推進し、戊戌政變發生後、日本に亡命してからは、「清議報」・「新民叢報」・「新小説」等を創刊して政治思想の改良・啓蒙を謀ると共に、「詩界革命」・「小説界革命」等を主唱して、晚清の政治思想及び文學の革新に對し、大いに寄與した梁啓超の晚清文學史に占める重要な役割について、異論を挿む人は少ないと思う。

ところが、この梁啓超について、未だ解明されない點がかなりあるように思える。ここで論じようとする光緒二十四年（一八九八）十一月十一日創刊の「清議報」第一冊から光緒二十六年一月十一日發行の同誌第三十五冊にかけて譯載された東海散士（柴四郎）著政治小説「佳人之奇遇」の中文譯「佳人奇遇」も、實は、梁啓超についての未だ解明されていない點を究明する重要な手掛りの一つであり、梁啓超の文學及び思想、引いては晚清の文學を理解する上においての貴重な資料の一つであると思う。

本論文においては、特にその譯者について、つまり誰が、何時、何處で、何故この日本の政治小説「佳人之奇遇」を譯するようになったかについて論考を加えて見たい。「清議報」登載の「佳人奇遇」は、どのように譯され、その誤植・名譯・誤譯・削改・外來語等に關する論考は、また別の機會に譲ることとする。

先ず、「清議報」の第一冊をひらいて意外に思うことは、目録のところには、

● 譯印政治小説序 任 公

● 政治小説佳人奇遇卷一 東海散士

とあつて、「譯印政治小説序」には梁啓超の號「任公」が記されているけれども、「政治小説佳人奇遇卷一」に對しては、原作者柴四郎の號「東海散士」が記されているだけで、譯者名は記されていない。

本文のところをひらいて見ると、政治小説 佳人奇遇卷一 日本東海散士前農商部侍郎柴四郎撰」と記されているだけで、やはり誰が中文に譯したかについては記していない。

「清議報」第二冊以降の目録になると、

● 政治小説

佳人奇遇卷一 東海散士

となつて、「政治小説」は、他の「本館論說」・「詩文辭隨錄」等と同様に、項目名または欄名として取扱われており、本文のところには、原著者名も記されておらず、見出し無しで詰められている。これは將來そのまま單行本として利用できるための措置だと思ふ。

このように、「清議報」の譯載を見た限りにおいては、どこにも梁啓超譯とは明記されていないのである。光緒二十六年一月二十一日發行の「清議報」第三十六冊から光緒二十六年十一月二十日發行の同誌第六十九冊にかけて、同じく「政治小説」欄に譯載された「經國美談」に對しても、同様に「前出使清國大臣日本矢野文雄著」と記されているだけで、譯者名は記されていない。

ところが、中村忠行氏は「中國文藝に及ぼせる日本文藝の影響(三)」(註一)において、

我々は『佳人之奇遇』なり『經國美談』なりの作者の生立ち、それから作品の思想・構想なりが、譯者梁啓超の心を深く動かしたものであらうといふ事實に對しても、亦目を覆ふことは許されないのであらう。

と「佳人之奇遇」と「經國美談」の譯者を梁啓超と斷定している。もつとも中村忠行氏は、「政治小説と清末の文壇」(註と)において、

その最初の榮光を擔うのは、梁啓超譯「佳人之奇遇」で、一八九八年十二月創刊の清議報第一冊以下に連載された。……「佳人之奇遇」について、周達譯の「經國美談」が同誌卅六號以下に掲げられるが……と「經國美談」の方は、「周達」譯に收めている。

また、實藤惠秀氏も「中譯日文書目録」(註3)において、
他(指梁啓超)在這雜誌上、介紹了種種新思想之外、還翻了「佳人之奇遇」。「經國美談」這樣的政治小説、繼續地登載了。在日本文學的介紹上、他也是一位開路先鋒。

と「清議報」誌上に譯載された「佳人之奇遇」と「經國美談」は、梁啓超の譯に依ると見なしている。

實藤惠秀編の「中譯日文書目録」には、「佳人之奇遇」は商務印書館本と上海中國書局本の二本を擧げており、民國以後の出版になつている。「經國美談」は廣智書局本と舊裝本の二本を擧げ、いずれも譯者名を載せていない。上海中國書局本(民國廿四年)の「佳人之奇遇」を、私は日比谷圖書館の實藤文庫で實物を見る光榮に浴したが、譯文は「清議報」本のと異り、「敍言」から察して、「田興復臨室主人」という人の譯に依ると思われる。一方、阿英編の「晚清戲曲小説目」に依ると、

佳人之奇遇 日本柴四郎著。光緒丁未(一九〇七)商務印書館譯印。

佳人之奇遇 經國美談合刻 無名氏譯。廣智書局本。

經國美談 日本矢野文雄著。周達譯。捫蝨談虎客評。光緒三十三年(一九〇七)廣智書局刊。又雨塵子譯本。又商務印

書館光緒二十八年（一九〇二）刊線裝本二冊。又商務平裝本一冊。

と「佳人奇遇」に關する二本は、いずれも譯者名を載せていない。「經國美談」には四本あり、うち二本は「周達譯」と「雨塵子譯」になつてゐる。前學中村忠行氏が「清議報」の「經國美談」を「周達」譯に改めたのは、この廣智書局の周達譯單行本に基づいたものと思われる。しかし、私はこれらの單行本を一覽する機會をまだ持たないので、「清議報」連載の「佳人奇遇」と「經國美談」は誰の譯に依るかを即斷し難いのである。

實藤惠秀氏が「佳人之奇遇」と「經國美談」とを梁啓超譯と見なしたのは、「清議報」連載の「佳人奇遇」の一ページ前にある「譯印政治小説序」なる一文が梁啓超の號「任公」と署名しているために、その後に来る「政治小説」欄の小説「佳人之奇遇」までをも梁啓超の譯に依るものとしたのだと思う。もつとも「譯印政治小説自序」となつていれば別であるが。

以上のように、「清議報」連載の中文「佳人奇遇」だけについては、原刊雜誌に見るところでは、「無名氏」譯と言つた方が正確な言い方である。

三

さて、では「清議報」連載「佳人奇遇」の譯者は一體誰だろうか。丁文江編「梁任公先生年譜長編初稿」（註4）に、「戊戌八月先生脱險赴日本、在彼國軍艦中一身以外無文物、艦長以佳人之奇遇一書俾先生遣悶、先生隨閱隨譯、其後登諸清議報、翻譯之始、即在艦中也。」（某記梁任公先生大事記）と梁啓超が「清議報」連載の「佳人之奇遇」を譯したことを記している。これは梁啓超と「佳人之奇遇」とのめぐり合いを詳記した唯一の興味ある貴重な資料である。

即ち、光緒二十四年戊戌（一八九八）八月、梁啓超が「戊戌政變」直後、清朝の官憲に追われ、危険を脱して日本に赴く際、日本の軍艦「大島」に乗り込んだが、身に書籍を持ち合わせていなかったたので、艦長が長い艦中生活の退屈凌ぎに

と日本の政治小説「佳人之奇遇」を彼に讀ませた。ところが、梁啓超はその「佳人之奇遇」を讀み出すや、感動を受けたのか、讀む傍から中國文に譯して行つた。その翻譯は、後に「清議報」に登載するものとなり、梁啓超が生まれてはじめて翻譯を試みたのも、實に、この「大島」艦中における「佳人之奇遇」との偶然なるめぐり合わせに依るといふのである。もし、「年譜」に収録したこの「某記梁任公先生大事記」の記事が信ずるに足るものであるならば、梁啓超と「佳人之奇遇」とのめぐり合わせも、これまた奇遇中の奇遇であると言えよう。

では、先ず誰が「佳人之奇遇」を譯したのか？ という第一設問を更に解明するために、我々は梁啓超自身の作品の中から、ただ一個所だけこれを裏付ける個所を擧げることができる。即ち、「清議報」第六十四冊、任公（梁啓超）作「紀事二十四首」の第二十二首に、

曩譯佳人奇遇成、曩に佳人の奇遇を譯して成り
每生游想涉空冥、毎に生ず游想の空冥を渉るを

從今不羨柴、東海、今從りは柴東海を羨まず

枉被多情惹薄情、枉に多情により薄情を惹かる

と昔「佳人之奇遇」を譯し終えたことを歌っている。「紀事二十四首」は、光緒二十六年（一九〇〇）春、梁啓超が夏威夷の火奴魯魯（檀香山）に赴いた時、見事な通譯をして呉れた原地の華僑の娘蕙珍と戀に陥つたロマンスを歌つたもので、梁啓超のもう一面を知る珍しい作品である。即ち、昔私は「佳人之奇遇」を譯し終えて、いつも小説の中に出て来る主人公東海散士と佳人幽蘭等が世界をまたにかけて活躍した一大ロマンスを見て、自分もあのように愛する人と大空（世界）を馳け廻つて見たいなあとと思つた。しかし、今このホノルルで佳人蕙珍と知り合つてからは、私はもう東海散士なんかを羨しく思わない。それにしてもこの薄情なる私は徒らに多情なる佳人によつて戀の心を呼び起こされて悩んでいる。これは梁啓超自身の告白に依るものであるから、「佳人之奇遇」は梁啓超が譯したという重要な確證になるだろう。

「清議報」登載の「佳人奇遇」の譯者が梁啓超であることを究明したけれども、しかし、それならば何故堂堂と譯者名を明記しないのか？ 當時の時点において梁啓超は果して本當に日本の小説を翻譯する程の日本語力があつたのか？ その上、「清議報」登載の中文譯「佳人奇遇」にまつわる次のようなエピソードもあるのである。即ち、柳田泉著の「政治小説研究上」(註し)に、

この時、誰からともなく、『佳人之奇遇』を漢譯して支那人にも讀ませ、大いに覺醒させようという議が出で、それには、武田(範之)は遊んでいるし、漢學の力も相當あることだからというので、武田に漢文譯にさせてみた。ところが、武田は小説家ではなし、忙しくもあるしで、巧くまとまらず困つていたところ、亡命客梁啓超(超)が「清議報」紙上で、一足先に漢譯を公にしたのを見ると、實に立派な、原文以上ともいふべき名文になつていたので、武田の譯の方は中止したものである。

と梁啓超が「清議報」に發表した中文譯「佳人之奇遇」が原文以上ともいふべき名文になつていたので、先に依頼されて譯していた武田範之の方を中止させてしまつたと記している。いくら「筆鋒常に情感を帶び、讀者に對しては、別に一種の魔力有り」(註し)と自らも認め、「新文體」を創作し、「言論界之驕子」と稱されている梁啓超といえども、こんなにまで上手に日本文の小説を譯すとは？ と、なお更疑いたくなるのである。

中村忠行氏も前舉の論文にて、

さて茲に一考すべきは、かくの如くにして、梁啓超が政治小説に對する興味を懷くに至つたとして、彼は又何故に、數ある作品のうちから、『佳人之奇遇』と、『經國美談』の二篇を、特に選んで之を紹介したのであろうかといふことである。(同註し)

と梁啓超が數多い日本の小説のなかから「佳人之奇遇」を選ぶことができ、しかも上手に譯せたことに對して疑問を投げ

ている。そしてこの疑問を究明して中村氏は、第一に、曾つて康有爲の萬木草堂の日本人教習であつた田野橋治氏。第二に、「佳人之奇遇」の欄外の批評と跋を書いたと言われ、明治三十一年大阪朝日新聞社特派員として上海にいた西村天因。第三に、同じ頃北京公使館附武官として中國にいた作者東海散士（柴四郎）の實弟柴五郎砲兵中佐（後の大將）。第四に、明治三十年三月十一日から日本公使として北京にいた「經國美談」の作者矢野龍溪等が、すでに中國において「佳人之奇遇」なり「經國美談」なりの二讀乃至は翻譯を、梁啓超等に慫慂したものと推定している。また次のように、

假に一步を譲つて考へるとしても、梁啓超が『佳人之奇遇』の翻譯を試み始めたのは、彼が軍艦「大島」によつて日本に亡命すべく東航してゐた時のことであるといひ、これが始めて公表せられたのは、その後僅かに二月を出でざる頃にはやくも創刊せられた『清議報』第一冊の誌上に於てである。してみれば、尠くもこれが翻譯の爲には、何人か支那文に堪能なるものが、種々助言を與へ、以て之を援けたと考へて差支へあるまい。

と論究し、日本に亡命してから譯しはじめたとすれば、康有爲や梁啓超とも深交があり、しかも「清議報」の第二・四・五冊に、漢文で「論東亞事宜」なる一文を投稿した山本梅崖（名は憲）が種々助言して援けたものと推定している。

このように、梁啓超が突如として日本の名政治小説「佳人之奇遇」を選んで、しかも原文以上ともいふべき名文に中國語譯したことに對しては、色々と疑問を挿む餘地があるようである。

五

では、梁啓超は日本に亡命する以前、果してどの程度の日本語力を持つており、日本の小説に對して理解していたのだろうか？ このことは、この問題を解く一つの鍵にもなるだろう。私は拙稿「時務報に見える梁啓超の日本に關する言論」（註）にて、すでに「時務報時代」における梁啓超の日本全般に關する知識を詳論して來たので、ここでは亡命以前の梁啓超の日本語力及び日本文學に對する理解の程度だけについて簡単に論じて見よう。

先ず最初に、梁啓超は光緒二十三年一月二十一日、「時務報」第十八冊に發表した「論學校五變法通議三之五幼學」な

る一文に、

日本創伊呂波等四十六字母、別以平假名・片假名、操其土語、以輔漢文、故識字・讀書・閱報之人日多焉。

と日本では、「伊呂波」字母を發明したことに依つて、文字を識り、書籍を讀み、新聞を閱覽する人が日日に多くなつて來てゐることを讃へてゐる。

また、光緒二十三年六月二十一日、「時務報」第三十三冊に發表した「論學校七變法通議三之七譯書」においては、

日本與我爲同文之國、自昔行用漢文。自和文肇興、而平假名・片假名等、始與漢文相雜廁、然漢文猶居十六七、日本自維新以後、銳意西學、所繙彼中之書、要者略備、其本國新著之書、亦多可觀。今誠能習日文以譯日書、用力甚勤、而獲益甚鉅。計日文之易成、約有數端：音少、一也。音皆中之所有、無棘刺扞格之音、二也。文法疏闊、三也。名物象事、多與中土相同、四也。漢文居十六七、五也。故黃君公度、謂可不學而能、苟能強記、半歲無不盡通者、以此視西文、抑又事半功倍也。

と日本は中國と「同文之國」であり、昔から漢文を使用しており、和文が興つてからは、平假名・片假名が漢文に相い雜るようになったが、それでも「漢文は猶十の六・七を居む」と言い、日本文は中國と同文であるため、學び易いことを説いてゐる。ここで特に注意に値いすることは、當時日本通であつた黃遵憲（公度）の言を引いて、「故に黃君公度謂ふ、學ばずして能くするも可なり、苟くも能く強記すれば、半歲にして盡く通ぜざる者無し、と。」とまで言つてのけてゐることである。これは明らかに梁啓超自身の體驗に依るものではなく、この時點まで彼は日本文を修得してゐないことを示すものであらう。

また光緒二十三年十月二十一日、「時務報」第四十五冊に發表した「讀日本書目志書後」においては、

康有爲・味・思・之・曰……且日本文字、猶吾文字也。但稍雜空海之伊呂波文、十之三耳。泰西諸學之書、其精者日人已略譯之矣。吾因其成功而用之、是吾以泰西爲牛、日本爲農夫、而吾坐而食之、費不千萬金、而要書畢集矣。使明敏士人、

習其文字、數月而通矣。

と師康有爲の言葉借りて、やはり日本は中國と同じく漢字を使用しており、ただ空海の發明した「伊呂波」文字を約十分の三入り雜せているだけで、もし「明敏なる士人をして其の文字を習はしむれば、數月にして通せん。」と、日本文の通じ易いことを強調している。

以上挙げた三個所が「時務報」に見られる梁啓超の日本文に對する見解であり、これに依つて梁啓超は、自分が未だ實際に日本文を學んだ體驗がないため、黃遵憲や康有爲の言葉を請賣りして、日本文を「學ばずして能くするも可なり」と信じ込んでいることがわかる。これらを、梁啓超が日本に亡命した後、發表した「論學日本文之益」（光緒二十五年二月十一日、「清議報」第十冊）と試みに比較して見ると、その違いがはつきりし、前者は日本文を學んでいない時に書いたものであり、後者は學んだ後に書いたものであることがわかれると思う。更に、光緒二十八年十一月に書いた「三十自述」に依ると、

自此居日本、東京者一年、稍能讀東文、思想爲之一變。

とあり、羅孝高氏の「任公軼事」には、

己亥春……時任公欲讀日本書、而患不諳假名、以孝高本深通中國文法者、而今又已能日文、當可融會兩者求得捷徑、因相研索、訂有若干通例、使初習日文、遂以中國文法顛倒讀之、十可通其八九、因著有和文漢讀法行世。雖未美備、然學者得此、亦可粗讀日本書、其收效頗大。

と云つてゐるから、梁啓超が實際に日本文を學習したのは光緒二十五年己亥（一八九九）春二月からであり、それ以前においては「假名を諳ぜざることを思う」状態であつたのである。しかし、羅孝高から「和文漢讀法」を學んでからも、「十に其の八・九を通ず可し」の程度であり、「此れ自り日本の東京に居ること一年、稍東文を讀むを能くす」が實情だつたであらう。「清議報」誌上における「佳人奇遇」の譯載は、光緒二十四年十一月十一日の第一冊から光緒二十六年一

月十一日の第三十五冊までの間である。梁啓超の日本滞在滿一年といえは、光緒二十四年九月三日から光緒二十五年九月二日までに當たるから、「清議報」第十冊（光緒二十五年二月二十一日）以前の譯載は、梁啓超が未だ日本文を學習してゐない時に譯したものであり、「清議報」第三十冊（光緒二十五年九月十一日）以後のものが、日本滞在滿一年後、つまりやや日本文が讀めるようになった時に譯したという計算にならう。このように考えると、「清議報」登載の「佳人奇遇」は、その大部分は梁啓超が未だ日本文を學んでいない時、所謂黃遵憲が云う「學ばずして能くするも可なり」を信じて譯したものであり、しかもその譯文が原文以上ともいふべき名文で、先に譯した武田範之の譯を中止せしめたというのだから、これまた不思議である。

六

次に、梁啓超が日本に亡命する以前、「時務報」に發表した日本文學に關する言論を見ると、ただ光緒二十三年十月十一日、「時務報」第四十四冊に發表した「蒙學報演義報合紋」の一篇だけである。即ち、西國教科之書最盛、而出以遊戯小説者尤夥、故日本之變法、賴俚歌與小説之力、蓋以悅童子、以導愚氓、未有善於是者也。

と單に日本の明治維新も俚歌や小説の力に負うところがある。なぜならば兒童を悦ばせ、大衆を導くのに、未だこれよりも善いものはないからである。と小説の兒童教育や社會教育的効果を強調してはいるが、なんら具體的な事實を擧げていないし、「政治小説」という名稱さえも未だ知らないかのようである。

これに引き換え、日本亡命後、光緒二十四年十一月十一日、「清議報」第一冊に發表した「譯印政治小説序」には、政治小説之體、自泰西人始也。……在昔歐洲各國變革之始、其魁儒・碩學・仁人・志士、往往以其身之所經歷、及胸中所懷政治之議論、一寄之於小説。……彼美・英・德・法・奧・意・日本各國政界之日進、則政治小説、爲功最高焉。と「政治小説」というジャンルの由來を説明し、日本をはじめ、世界各國の政界が日日に進歩して來たのは、「政治小説」

の功に負うところ最も大であると説いている。これはこの時點になつて、梁啓超がはじめて「政治小説」に接し、その政治教育的効果の大なることを體驗したことを示すものである。しかし、未だ「佳人之奇遇」以外の小説名を擧げていないところを見ると、彼はこの時點において、未だ日本の他の政治小説についての詳細を知つていなかったと言つてよいであらう。ところが光緒二十五年八月一日、「清議報」第二十六冊に發表した「飲冰室自由書凡九則」の第五則「傳播文明三利器」(「自由書」の單行本に依る題名)なる一文になると、明治十五、六年の「自由民権運動」と明治の「政治小説」について詳論しており、具體的に作者名・作品名をも澤山擧げているから、この時點においては、梁啓超がやつと日本の政治小説について詳しく理解したと言つてよいであらう。一つの新しい知識を得たらすぐ國民の前に發表すると思われる梁啓超が、前舉「蒙學報演義報合鈔」においては、日本の政治小説「佳人之奇遇」に全然觸れていないし、「政治小説」という名稱も使用しておらず、具體的事柄をも擧げ得なかつたことは、彼が日本亡命以前においては、未だ「佳人之奇遇」や「經國美談」等の政治小説を知つていなかったと私は推測したい。

梁啓超の日本亡命以前における日本語力については、「戊戌政變」當時駐清國代理公使であつた林權助氏の「わが七十年を語る」(註)を讀めば、非常にはつきりするであらう。即ち、「先にわたしが呼鈴を押ししまつたので、通譯が出て來た。この場合事の速かなのを必要とする故、それで筆談をやめた。」と記録しているから、梁啓超は日本人に對しては「筆談」しかできず、事の緊急に際しては、「通譯」を交えるほかなかつたのである。これはこの時點において、梁啓超は一言も日本語を話せなかつたことを示すであらう。

七

では、全然日本語を話せない上に、日本文をも學んだことがなかつた時點において、梁啓超は何故この「佳人之奇遇」を譯す氣になり、またこのような翻譯が可能になつたか? ページ數の都合で、私はその主な理由だけを簡單に列擧して見たい。

先ず第一に、「佳人之奇遇」の文體がちよろど前述黃遵憲に依つて知らされた「漢文猶十の六・七を居む」という漢文調のものであつたため、彼は「學ばずして能くするも可なり」という當時の日本語に對する認識のもとに、少しも躊躇せず試みる事ができたのであると思う。今原著の一節とその譯文を挙げれば、このことがよく理解されよう。

〔原文〕嗟乎、舟に蹄水に遭ひ、花に窟窟に會し、高談心を娛ましめ、哀音耳に順ひ、白日已に隠れ、繼ぐに朗月を以てす。歌舞漸く止て手を携へ共に庭園に遊ぶ。花香馥郁、山河煙の如し。當時余顧みて曰く、此樂再び難しと。感な以て然りと爲す。今果して天涯に離散し、幽蘭・范卿、化して異物と爲る。節同じく時異に、物是に人非なり、我が悲は如何と。（春陽堂本「佳人之奇遇」）
（第四卷第五頁上段）

〔譯文〕嗟乎！舟遭蹄水、花會窟窟；高談娛心、哀音順耳；白日已匿、繼以朗月。歌舞漸止、携手共步庭園。花香馥郁、山河如煙。當時余顧曰：「此樂難再。」感以爲然。今果天涯離散、幽蘭・范卿、化爲異物。節同時異、物是人非、我悲如何？（『清議報』第十二冊「政治小」
說「佳人之奇遇」卷四」第六頁裏）

ここに挙げた原文の一節は、特に漢字の多いのを選んだのではないが、合計一三八字ある原文のうち、漢字が八三字もあり、文全體の六〇、一五％を占めている。假名は五五字だけで、全體の三九、八六％を占めている。これはちよろど黃遵憲のいう「然漢文猶居十六七」にほど合致し、康有爲のいう「但稍雜空海之伊呂波文、十之三耳。」にもほど合致しているからこそ、梁啓超は原來持つていた日本語に對する「可不學而能」という信念で、大膽にも「隨聞隨譯」と翻譯を試みることができたのである。もし、原文がこのような假名の少ない漢文調の日本語ではなく、そして梁啓超が多少なりとも日本語を學んだことがあるならば、恐らくこのような無鐵砲なことではできなかったであろう。「譯文」の方をよく検討してみると、「原文」の「隱」を「匿」に、「遊」を「步」に改めたほかは、原文の漢字を一字違わずそのまま使用している。これでは日本語を中國文に翻譯したというよりは、漢文の書き下し文を、元の漢文の順序に復元したと言つてもよいぐらいである。漢文の造詣が深い梁啓超ならば、このような翻譯は「學ばずして能くするも可なり」であると思う。

第二には、「佳人之奇遇」の内容は自由・民権・獨立・平等・革命等の政治革新思想を唱えたものであり、その上、義に感じて同志佳人幽蘭のために、紅蓮と范卿が喜んで死地に赴く美談、各國の變法・革命、列強侵略の實態、弱小國滅亡の原因等の史實を折り込んだ一大ロマンスであるから、當時「戊戌變法」に失敗し、同志譚嗣同とも死別し、命からがらで日本の軍艦「大島」に落ち延びた梁啓超にとつては、大いに共鳴し、感激して「讀む傍から譯して行く」ものがあつたと思われる。梁啓超の「戊戌政變記」(註)に依ると、譚嗣同は梁啓超と訣別するに際し、

捕者既不至、則於其明日入日本使館與余相見、勸東遊、且携所著書及詩文辭稿本數冊・家書一篋託焉、曰：「不有行者、無以圖將來；不有死者、無以酬聖主。今南海之生死未可卜、程嬰・杵臼、月照・西鄉、吾與足下分任之。」遂相與一抱而別。……被逮之前一日、日本志士數輩苦勸君東遊、君不聽。再四強之、君曰：「各國變法無不從流血而成、今中國未聞有因變法而流血者、此國之所以不昌也。有之、請自嗣同始。」卒不去、故及於難。

と梁啓超に日本へ亡命することを勧め、自分は彼の趙朔の眞孤を救うために、進んで犠牲になつた公孫杵臼、または明治維新のために先に死んで行つた僧月照に譬え、從容として死地に止まり、同志梁啓超を生き延びて事を成し遂げた程嬰と西郷隆盛に譬えて、遺業を託したのである。また、日本の志士がしきりに彼に日本亡命を勧めたのに對し、譚嗣同は「各國の變法は流血に從りて成らざるは無し、今中國未だ變法に因りて流血せる者有るを聞かず、此の國の昌まかんならざる所以なり。之れ有らば、請う嗣同より始めんことを。」と言つて逃亡を拒否したのである。これは明らかに自分を犠牲にして中國變法維新の起爆剤にならうと考へたからである。梁啓超が日本に亡命してからすぐ創刊した「清議報」の「橫濱清議報敘例」において、もう一度この譚嗣同の言葉を引用し、更に、

我支那數千年來、義俠之風久絶、國家祇有易姓之事、而無革政之事。士民之中、未聞有因國政而以身爲犧牲者、是以民氣嗒然不昌、國勢蕭焉不振……

と「義俠之風」と「因國政而以身爲犧牲」を強調したのも、亡友譚嗣同の遺志を繼いで國を興さんがためであつた。更

に、「譯印政治小説序」にて、

彼美・英・德・法・奧・意・日本各國政界之日進、則政治小説爲功最高焉。英名士某君曰：「小説爲國民之魂」。豈不然哉！豈不然哉！今特採外國名儒所撰述、而有關切於今日中國時局者、次第譯之、附於報末、愛國之士、或庶覽焉。

と小説の政治に及ぼす影響を重視し、「國民之魂」を救ひ、「愛國之士」の愛國心を覺醒しようとしたのも、皆譚嗣同の遺志を繼ぎ、當時中國人に最も缺けていた「犧牲的精神」を培養して、救國の偉業をなし遂げるためであつたと思われる。これは「戊戌變法維新」の失敗に依つて得た教訓であり、梁啓超が小説の力を借りて政治思想の革新を民衆に謀ろうとしたためであると思われる。

第三には、梁啓超が光緒二十四年八月十一日、塘沽にて軍艦「大島」に乗り込んでから、九月三日に日本の吳軍港に到着するまで、なんと意外にも二十三日間かかつたという事實である。このような長い艦上生活であつたからこそ退屈もし、艦長から退屈凌ぎに「佳人之奇遇」を渡され、またそれを讀んで譯す時間的な餘裕も有りうるのである。もし日本に着いてからとしたら、到底小説に興味を持ち、日本の書店を廻つて小説を選択し、それを讀んで譯して見ようという餘裕も心境もなかつたと言えよう。

八

以上論じて來たように、「清議報」登載の「佳人奇遇」の譯者は梁啓超であり、しかもこれを譯すようになったのは、「年譜」にいう日本に亡命する途上の「大島」艦上において、退屈凌ぎにと偶然艦長から渡されたのを、讀んで行くうちに感動を受け、讀む傍から譯して行つたという全くの奇遇に依つて譯したと見るべきであろう。亡命以前、中國においてすでに「佳人之奇遇」を一讀したと思われぬし、ましてや全十六卷、線裝本の原本にして一尺五寸以上もある部厚い書籍を、逃亡の際に艦に持ち込むことは當然考えられない。さらに、梁譯文を詳細に検討してみると、名譯及び原著の誤植訂正をなしたと思われる個所もあるが、しかし、日本の和歌を譯していないのや、「て・に・を・は」や肯定・否定等

日本文の初歩的假名使いに對する誤譯が著しくあることを合わせ考えると、(このことについては、第二十一回中國學會にて研究發表した拙論を参照されし) より一層梁啓超が日本文を學ばないで譯したことが裏付けられよう。原刊雜誌に譯者名を明記しなかつたのも、このことと關連があり、別の機會に詳論するが、日本人の助言や指教を受けたとは、ちよつと考えられないと思う。(本論文の引用文の傍點は筆者が付けた。)

(國士館大學助教)

(註1)：昭和十八年八月、「臺大文學」第八卷第二號。中村忠行著「中國文藝に及ぼせる日本文藝の影響(三)」。「二 梁啓超の譯業とその影響(3)」。

(註2)：昭和四十一年十月、筑摩書房「明治文學全集」の「月報21」、中村忠行著「政治小説と清末の文壇」。

(註3)：昭和二十年一月、財團法人國際文化振興會、實藤惠秀編「中譯日文書目錄」第一三頁。

(註4)：世界書局、丁文江編「梁任公先生年譜長編初稿」第八〇頁。

(註5)：春秋社、柳田泉著「明治文學研究」第八卷「政治小説研究上」第三八一頁。

(註6)：臺灣中華書局、梁啓超著「清代學術概論」第二十五。

(註7)：斯文會「斯文」第六十二號、拙稿「時務報に見える梁啓超の日本に關する言論」。

(註8)：第一書房、昭和十年四月七日再刷發行、林權助述「わが七十年を語る」第二十七話「快男兒梁啓超を救ふ話」。

(註9)：臺灣中華書局、梁啓超著「戊戌政變記」第一〇八頁、第一〇九頁。

(一九七二、二、一六)